

蜂須賀茂韶の海外での功績

佐藤 征弥¹⁾・高須賀 友里²⁾・松浦 大樹²⁾・高木 佳美³⁾・富塚 昌輝¹⁾・依岡 隆児¹⁾・
宮崎 隆義⁴⁾

1) 徳島大学大学院社会産業理工学研究部, 〒770-8513 徳島市南常三島町 2-1
E-mail: satoh.masaya@tokushima-u.ac.jp

2) 徳島大学総合科学教育部, 〒770-8502 徳島市南常三島町 1-1

3) 徳島大学大学院社会産業理工学研究部総合技術センター, 〒770-8513 徳島市南常三島町 2-1

4) 徳島大学教養教育院, 〒770-8502 徳島市南常三島町 1-1

Hachisuka Mochiaki's Overseas Achievements

Masaya Satoh¹⁾, Yuri Takasuka²⁾, Daiki Matsu-ura²⁾, Yoshimi Takagi²⁾, Masaki Tomitsuka¹⁾,
Ryuji Yorioka¹⁾, Takayoshi Miyazaki⁴⁾

1) Graduate School of Technology, Industrial and Social Sciences, Tokushima University, Tokushima
770-8502, Japan (E-mail: satoh.masaya@tokushima-u.ac.jp)

2) Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Tokushima University, Tokushima 770-8502, Japan

3) Center for Technical Support, Tokushima University, 770-8506, Japan

4) Institute of Liberal Arts and Sciences, Tokushima University, Tokushima 770-8502, Japan

Abstract

Hachisuka Mochiaki (1846-1918) was the last lord of the Awa (Tokushima) domain, and he became a successful businessman and a statesman after the Meiji Restoration. He went to the UK to study when he was 25 years old, and stayed there for seven years, during which he graduated from college at the Balliol College, University of Oxford. Three years after returning to Japan, he was appointed to an envoy extraordinary and minister plenipotentiary of Japan in France (also serving as a minister in Spain, Portugal, Switzerland and Belgium) and he stayed in Paris three years. Despite ten years of foreign life, little has been known about his overseas activities. In this study, we investigated his overseas activities using digital archives of European libraries, and could find information from British Newspaper Archive, Welsh Newspaper Online, and Gallica.

He began to attend public events in the UK after graduating from the Oxford University. He received in an audience by Queen Victoria and the Prince of Wales in 1877 and 1878, and attended to

parties hosted by the Ministry of Foreign Affairs. He also participated in the launching ceremony of three Japanese warships Kongo, Fuso, and Hiei in 1877.

He worked variously as a diplomat in Paris during 1884-1886. He signed three treaties, the Geneva Convention, the treaty on remittance by postal money order, and the International Meter Convention. Compared with signing the Geneva Convention remaining two have not received much attention so far. In this study we found that he encouraged the Japanese government to join the International Meter Convention and negotiated with the Comité International des Poids et Mesures many times.

He organized Japanese exhibition at a museum to introduce Japanese culture to Parisians, and he contributed to the academic exchange between France and Japan with the Geographical Society. And he and his wife Yoriko participated in many social events, and they held parties, concerts and theaters in Paris and Brussels. Several French newspapers mentioned elegant behavior of his wife Yoriko at those parties. And

He focused on politics and business after returning to Japan, but also worked to promote exchange with foreign countries. In particular, he established the Welcome Society, which was the first organization in Japan for attracting and accommodating foreign tourists, with other of founders, and became the chairman of the organization. His abundant overseas experience and wide-ranging personal connections helped to establish this association.

key words : diplomacy, Fuso, Hachisuka Mochiaki, Hachisuka Yoriko, Hi-ei, International Meter Convention, Kongo, The Welcome Society

1. はじめに

蜂須賀茂韶（はちすかもちあき）は、藩政期の終わりに徳島藩の最後の藩主となり、明治維新後は外交官、実業家、政治家として活躍した多彩な顔を持つ人物である。彼の生涯については、長年彼に仕えて実業面を支えた露木亀太郎による伝記^aや徳島出身の漢学者で、宮内省御用掛を務めた山田貢村による評伝^b等で知ることができる。それらの資料から茂韶の生涯を簡単にまとめると次のようになる。茂韶は弘化3（1846）年、第13代藩主蜂須賀齊裕（なりひろ）の次男として江戸藩邸で生まれ、15歳まで江戸で過ごした。

^a 露木亀太郎『蜂須賀茂韶公 隠れたる功績』私家版（1937）

^b 岡田鴨里, 山田貢村『和訳蜂須賀家記』.阿波郷土会.（1943）. 本書は阿波徳島藩に仕え、洲本学問所教授を務めた岡田鴨里による『蜂須賀家記』を山田貢村が書き直したもので、蜂須賀茂韶については後半部分を追加している。

慶應4（1868）年1月に齊裕が亡くなると第14代の藩主となったが、すぐに明治維新を迎え、翌明治2（1869）年に藩籍奉還により徳島県知事に就き、明治4（1871）年まで務めた。明治4（1871）年10月22日に、明治天皇が「華族の海外留学を奨励し給へる勅諭」を発して華族や旧藩主の子弟の海外留学を奨励すると、茂韶はすぐさま翌年の1月にイギリスに私費で遊学した。イギリスに着いてすぐに鉄道の発達を目の当たりにした茂韶は、日本の富国のためには鉄道の導入が急がれると考え、明治5（1872）年10月に「鉄道建築之義ニ付建言書」を太政官に提出し^c、それが契機となって日本鉄道株式会社が設立された。7年にわたるイギリス遊学を終えて帰国した茂韶は、明治15（1882）年12月に駐フランス国特命全権公使を拝命し、パリに赴任した。在任中の仕事として、ジュネーブ条約に調印したことはよく知ら

^c 徳島県立文書館編集・発行。「第32回企画展 徳島近代交通史一船から鉄道へ」（2006）。

れている。3年間の外交官の任を終えて帰国した茂韶は政治家となり、第11代東京府知事（明治23-24（1890-91）年）、貴族院議長（明治24-29（1891-96）年）、文部大臣（明治29-30（1896-97）年）などの要職を次々と務めた。

彼はまた積極的に実業界に進出し、明治の日本の経済界を牽引した渋沢栄一や益田孝や大倉喜八郎らと共同で会社を運営した。特に渋沢栄一は茂韶にとって強力なビジネスパートナーであり、二人が協力した会社には、日本鉄道株式会社、大阪紡績株式会社、東京人造肥料株式会社、日本煉瓦製造株式会社、東京帽子株式会社がある^a。茂韶はまた、北海道雨竜での農場経営にも力を注いだ。

茂韶に関して、政治家や実業家としての活動については多数の資料が存在するが、イギリス遊学やパリで外交官を務めていた時期の活動については情報が乏しい。イギリス遊学時代に関しては、幕末から明治期の徳島の政治を研究したフレイザー（Andrew Fraser）や明治期における徳島出身の留学生について詳細に調べた佐光によって次のようなことが分かっている。妻斐（あや）や徳島の若者らを伴いロンドンに着いた茂韶は、ロンドンの一等地ペルメルに居を構え、ネスビット（Henry Arthur Nesbitt）のような有力者らと交わった^d。1873（明治6）年12月に病気がちであった妻斐を帰国させ、翌年の4月に離婚した^e。茂韶は遊学を続け、明治7（1874）年からオックスフォード大学に入学し、1876（明治9）年まで在籍して政治・経済学を学んだ^{f, g}。在学中は、後に自由党の党首で首相となるアスキス

（Herbert Henry Asquith）と親交を結んだ^{b, d}。卒業後もしばらくイギリスに留まり、1879（明治12）年1月に帰国した。

外交官としてパリで3年間勤務した時の活動については、これまで詳細に調べられたことがなく、ジュネーブ条約に調印したこと以外ほとんど知られていない。そこで、本研究はヨーロッパの図書館が管理するデジタルアーカイブを利用して、茂韶が海外でどのような活動を行ったのかを調査した。その結果、イギリスとウェールズの新聞およびフランスの新聞や書籍等において茂韶に関する情報を数多く見つけることができた。本稿では、調査で見つかった茂韶の海外での活動に関する資料を網羅的に挙げ、その中で主だったものについては説明を加え、彼の海外での功績を検証した。

イギリスやパリでの経験は、帰国後の彼の活動にも大きな影響を与え、特に1893（明治26）年に日本で最初に作られた外国人観光客の誘致のための組織である喜賓会（The Welcome Society）創立の発起人となり、会長に就いたことに繋がった^h。蜂須賀茂韶は、日本が封建体制から脱して近代化および国際化へ踏み出した時代を、個人の人生において体現した人物である。彼のヨーロッパでの活動の調査を通じて日本の洋化の歴史の一端を浮き彫りにすることを試みたい。

2. 調査方法

調査はインターネットで閲覧できるデジタルアーカイブを利用して行った。主に利用したデータベースは、ウェールズ国立図書館の Welsh Newspaper Onlineⁱ、英国図書館の British Newspaper Archive^j、フランス国立図書館電子図

^d Andrew Fraser “Hachisuka Mochiaki (1846/1918): from feudal lord to modern businessman”. Papers on Far Eastern History, No. 27, 93-104 (1988).

^e 小川裕久、「蜂須賀斐のこと—開化期に渡英した一女性の肖像—」新世紀男女共生社会へのメッセージ。vol.10. 73-77 頁 (2010)。

^f 佐光昭二、『阿波洋学史の研究』の蜂須賀茂韶の項目。徳島県教育印刷。551-564 頁 (2007)。

^g 佐光昭二、『阿波洋学史の研究 続編』の「蜂須賀家・英国留学三代記」の項目。徳島県教育印刷。355-389 頁 (2019)。

^h 佐藤征弥、「喜賓会設立における蜂須賀茂韶の存在と旅行案内所に描かれた四国」依岡隆児編、『平成30年度総合科学部創生研究プロジェクト経費・地域創生総合科学推進報告書「異文化に照らし出された四国～外国語文献の調査研究から」』。57-69 頁 (2019)。

ⁱ <https://newspapers.library.wales>

^j <https://www.britishnewspaperarchive.co.uk>

書館の Gallica^k の3種類である。前者2つは名称通り新聞記事のアーカイブであるが、Gallicaは新聞の他に書籍や写真も含まれる。これらのデジタルアーカイブにアクセスして“Hachisuka”というキーワードで検索した。British Newspaper Archiveでは54件、Welsh Newspaper Onlineでは7件、Gallicaでは140件の情報がヒットした(2019年3月22日時点)。なお、同一の新聞資料がBritish Newspaper ArchiveとWelsh Newspaper Onlineの両方の検索結果にあがったケースが4件あった。

この他、ヨーロッパではドイツとスイスでデジタルアーカイブが利用できる。ドイツのDeutsche Digitale Bibliothek^lでは蜂須賀家に伝来していた「梅下寿老図」の写真が見つかったが、重要ではないので本稿では省く。スイスは、茂詔が全権公使を兼任した国であるが、国立図書館が管理するHelveticArchives^mでは情報が得られなかった。

また、蜂須賀茂詔が加盟することを推進したメートル条約に関しては、国際度量衡委員会(Comité International des Poids et Mesures, CIPM)発行の1885(明治18)年の活動報告書(表2の111)により確認した。

なお、上記のデータベースにおいて“Hachisuka”で検索すると茂詔以外の情報もヒットする。例えば茂詔の息子の正詔はケンブリッジ大学に留学したが、British Newspaper Archiveには彼の在籍中の成績が定期的に新聞に載っている。また、正詔の息子の正氏もケンブリッジ大学に留学し、後に鳥類学者となって目覚ましい業績を残したため、多数の鳥類学関連の文献に彼の名前が登場する。彼はまた飛行機乗りとしても有名で、愛機プス・モスやジプシー・モスを操縦して数々の飛行機レースに出場し、それに関連する資料も多い。また、茂詔は妻斐の弟の蜂須賀萬亀次郎(まきじろう)をイギリスに同行させたが、萬亀次郎についても、ケンブリッジ大学ペンブル

ックカレッジの入学者リストや学校の成績に名前を見つけることができた。しかし、本稿は茂詔に関する情報に限定して扱うことにした。正詔、正氏、萬亀次郎については稿をあらためて紹介したい。

3. 調査結果

調査結果を基に、茂詔の生涯を、特に海外での活動を中心に表1にまとめた。それぞれの事項の根拠資料は番号を付して表2に示した。

以下、表1の中から重要と思われる事柄について紹介していく。文章中のカッコ内の数字は表1、2の資料番号であることをことわっておく。

3-1. イギリス遊学時代

茂詔は1872(明治5)年1月から1879(明治12)年1月まで、7年間イギリスに滞在した。佐光の調査によればオックスフォード大学のベリオールカレッジに1874(明治7)のサマータム(4-6月期)に入学し、途中トリニティカレッジに移り、1876(明治9)年まで在籍した^{f, g}。

今回の調査では、オックスフォード大学入学前の情報は見つからなかった。大学時代については次に挙げる2つの資料が見つかった。

茂詔の荷物を載せた馬車が暴走

Oxford Times紙の5月16日の紙面に「危機一髪」と題された記事があり、あわや事故という交通トラブルがいくつか記されている中に「ベリオールカレッジの日本の紳士蜂須賀氏の馬車が暴走した」ことが記されている(1)。馬車には茂詔の荷物が積まれていて、茂詔自身は乗っていなかった。茂詔は、この年のサマータム(4-6月期)から入学しているので^{f, g}、引越しの荷物の運搬時の出来事であると思われる。

三宮義胤とアレーシアの結婚式で付添人を務めた

イングランド東部のスタンフォードを本拠地とするStamford Mercury紙の1874(明治7)年5

^k <https://gallica.bnf.fr/accueil/fr/content/accueil-fr?mode=desktop>

^l <https://www.deutsche-digitale-bibliothek.de>

^m <https://www.helveticaarchives.ch/suchinfo.aspx>

月8日の記事に、茂韶が参列した結婚式のことを詳しく紹介されている(2)。新郎新婦は、三宮義胤(さんのみやよしたね)と地元出身のアレーシア・レイノア(Aletha Raynor)であった。記事では茂韶について「最後の大君(日本人がミカドと呼ぶ皇帝から精神面を除く全ての権力を付与された存在)^fの親戚で、大名であった蜂須賀が花婿の付添人を務めた」と記されている。日本人との結婚は大変な話題になったようで、式場の教会は見物人で混雑し、入場できない者も大勢いたと記されている。

三宮は明治3(1870)年に東伏見宮彰仁親王のイギリス留学に随行し、親王が帰国した後もイギリスに残ってユニバーシティカレッジに通い、茂韶は彼の留学の費用を援助していた^f。三宮は後年、外務官僚や宮内官僚を務め、喜賓会の幹事にも名を連ねた。茂韶は、徳島の若者をイギリスに連れていき面倒をみていたが、三宮のように他の地域からの留学生に対しても援助していた。『和訳蜂須賀家記』^bには、茂韶が援助し、その後出世した人物として、三宮義胤、菊池大麓、古澤滋の名前を挙げられている。

オックスフォードを卒業した後も茂韶はしばらくイギリスに留まり、次に挙げるようにヴィクトリア女王に拝謁したり、戦艦の進水式に出席したりと公的な場に登場する。

バックingham宮殿でヴィクトリア女王に拝謁

London Daily News紙の1877(明治10)年3月15日に、バックingham宮殿で催されたヴィクトリア女王の謁見の様子を伝える記事がある(3)。この謁見は、記事の前日の3月14日に行われ、謁見の間において王室のメンバーや貴族らが集まる中、ゲストが女王に拝謁した。茂韶は拝謁者のリストの外交関係者の中に名を連ねており、“Japanese Minister — The Prince Hachisuka (ex-Daimio of Awa)”と記されている。ministerは外国使節を指す言葉で、この記事ではambassadorとministerが区別して用いられている。遊学中での茂韶には公式の肩書きがないた

^f 大君は江戸の徳川家を指し、蜂須賀茂韶が徳川家斉の孫であることを暗に示している。

め、便宜的にministerとしたと思われる。また、“The Prince Hachisuka”のprinceという尊称は、大国に庇護されている小国の王という意味で使われ、日本では「公」と訳されることが多い。“ex-Daimio of Awa”は、阿波の旧大名(藩主)の意味であり、princeが指す内容を説明している。この記事に限らず、茂韶を“prince Hachisuka”と記している資料がいくつもある。後年、パリに滞在中の1884(明治17)年12月に日本政府から侯爵を授かったが、それ以降は“marquis Hachisuka(蜂須賀侯爵)”と称されることが多くなった。

なお、この時のヴィクトリア女王の謁見には、イギリスに遊学中であった肥前の最後の藩主であった鍋島直大(なべしまなおひろ)と胤子(たねこ)夫妻が招かれており、茂韶と同じくministerのリストに載っている。

翌1878(明治11)年5月17日にも、茂韶はセント・ジェームズ宮殿で行われた王室の謁見に招かれたが、この時はヴィクトリア女王は出席せず、女王の命で皇太子が執り行った(26)。

英国外務省で晩餐会

Morning Post紙の1877(明治10)年3月19日の記事に、3月17日に英国外務省で開かれた晩餐会の記事があり、出席者のリストに茂韶の名前が載っている(4)。彼の他に、日本人の列席者として駐英国日本国特命全権公使を務めていた上野景範と外務一等書記生の園田孝吉が出席していた。

軍艦の進水式に主席

1877(明治10)年の4月から6月にかけて、茂韶は3隻の軍艦「金剛」「扶桑」「比叡」の進水式に出席した。「金剛」と「比叡」は同型の装甲コルベット艦、「扶桑」は装甲フリゲートであり、いずれも日本政府がイギリスに建造を発注し、軍艦設計技師ジェームズ・リード卿(Sir Edward James Reed)が設計を担当した。これら3隻は別々の造船所で建造され、進水式も異なる日に催された。次に示すようにイギリスやウェールズの複数の新聞がこれらの艦の進水式の様子を詳しく伝えている。

「扶桑」の進水式

フリゲート「扶桑」の進水式が4月21日にロンドンのサミュエル・ブラザース造船所にて催され、日本からは茂韶の他に日本側から上野公使夫妻、公使館職員、prince Nagaoka^oが出席し、イギリスからは国会議員や海軍提督、また、中国の外交官も出席していた(5-7)。

「金剛」の進水式

コルベット艦「金剛」の進水式が4月17日にヨークシャー州ハルのアールズ造船技術会社のドックで催され、上野景範公使夫妻とともに茂韶が出席した。これを報じた記事(8-16)のうち3つには出席者にprince Hachisukaの名が見られるが、他の記事はprincess Hachisukaとなっている。二人が一緒に書かれているものはない。この時期、茂韶と斐は離婚し、斐は日本にいたので、princessとあるのは間違いである。

「比叡」の進水式

コルベット艦「比叡」の進水式は、6月13日にウェールズのペムブロークドックで催され、その様子をイギリスとウェールズの複数の新聞紙が報じている(19-23)。ウェールズの地元紙は、6月11日に日本からの出席者がテンビー駅に到着した時からの様子を詳細に伝えている。地域をあげた大変な歓迎ぶりで、関連行事が盛大に行われた。茂韶は、12日のディナーパーティにおいて、上野公使や園田孝吉とともにスピーチを行った(21)。彼のスピーチの全文を本稿の最後に補足資料として載せる(補足資料1)。

また、日本からの一行は、テンビーに行く前に立ち寄ったグロスターでも大歓迎を受けたことが地元紙に載っている(17,18)。

なお、戦艦「比叡」は、2019(平成31)年2月にガダルカナル島沖の海底で発見され、大きな話題となったが、茂韶が進水式に参加した「比叡」の後継艦である。

^o 熊本藩最後の藩主細川護久の弟で、当時ケンブリッジ大学に留学中の長岡護美のことと思われる。

3-2. イギリスから帰国後

1879(明治12)年1月にイギリスから帰国した茂韶に、すぐに日本政府から二人の外国要人の接待係を務めるよう命が下った。一人は皇帝ヴィルヘルム1世の孫ハインリヒ(Albert Wilhelm Heinrich)であり、海軍士官候補生として来日し、1879年6月から翌年の4月まで日本に滞在した。茂韶は横浜港への出迎えに行き、日光への旅行にも同行した^p。もう一人はアメリカ元大統領グラント将軍(Ulysses Simpson Grant)で、大統領を退任した後世界を周遊し、日本には1879(明治12)年6月に到着し、2ヶ月ほど滞在した。茂韶は7月12日に、両国川の川開きに合わせて私邸に招待した^q。茂韶が彼らの接待係を仰せつかったという情報は、ヨーロッパにも伝えられ、ウェールズの新聞がこれを報じている(29)。

3-3. パリ外交官時代

3-3-1. 公使就任

パリ赴任

1882(明治15)年12月、茂韶は駐フランス国特命全権公使を拜命し、翌年1月にはスペイン、ポルトガル、スイスの公使を、3月にベルギーの公使を兼務することが決まった^r。茂韶は、前年に結婚した夫人随子(よりこ)を伴って出発し、1883(明治16)年5月にパリに着任した。随子は水戸徳川家の徳川慶篤の長女であり、1881(明治14)年5月に二人は結婚した。

パリに到着する少し前の5月11日、フランスの新聞に、新公使を紹介する次のような内容の記事が載った(30)。日本の封建制度は1868年(明治元)年の革命により崩壊し、現在はミカドが君

^p 内山正熊、「吹田事件(一八八〇年)の史的回顧」法學研究：法律・政治・社会, 51巻, 9-49頁(1978)。

^q 「グラント氏蜂須賀邸へ招待小蒸気ホード差出の件事務課伺」。海軍省-公文類纂-M12-72-480(所蔵館：防衛省防衛研究所)。

^r 「公文類聚・第七編・明治十六年・第十二巻・外交一・条約・外国贈答・外賓接待・外交官発差。

臨している。茂韶は、かつての多数の旧藩の一つ阿波の領主で、維新後も大きな財産を残すことに成功した数少ない領主である。このような状況はドイツの有力な公 (prince) と似ている。彼は現在 38 歳で、長年イギリスで過ごし、英語が堪能である。彼と一緒に来る夫人は、最後の将軍の妹である。夫妻はともに良家の血筋を受け継いでおり、パリにおいて太陽が昇る帝国の存在感を高めていくであろう。

この記事は、茂韶夫妻の家柄に注目している。フランスは王政・帝政を廃して第三共和政の時代に入っていたが、貴族階級は依然社会に大きな影響力を有しており、華やかな社交界は庶民の耳目を集めていた。なお、記事の中で随子が最後の将軍 (徳川慶喜) の妹であると記しているのは間違いで、正しくは姪である。

フランスの新聞に続いてイギリスの新聞にも新公使となる茂韶を紹介する記事が載った(31)。茂韶が阿波の旧藩主であったことやフランス語はできないが英語が堪能であることが記されている。また、記事の中で、茂韶の妻は、処刑された江戸の最後の将軍の娘であったとあるが、これも間違いである。最後の将軍である徳川慶喜は処刑されていないし、随子は慶喜の娘ではなく姪である。この記事は、フランスからの情報だけに基づいて書かれたものなのか、茂韶がイギリスに7年間遊学していて、その間にオックスフォード大学を出たことは触れられていない。

公使館職員名簿

フランス外務省が発行した外交官名簿 (33) には、茂韶が “M. JUNII HACHISUKA, envoyé extraordinaire et ministre plenipotentiaire” と記載されており、訳すと「特命全権公使・従二位・蜂須賀氏」となる。「従二位」は、1868 (明治元) 年に賜った位階である。また、名簿には公使信任状の日付が記載されており “24 mai 1883” と記載されており、公使として正式に認められたのが 1883 (明治 16) 年 5 月 24 日であることが分かる。

名簿には茂韶以外の日本国公使館の職員についても載っている。フランス外務省が発行した名簿は 1883 (明治 16) 年、1884 (明治 17) 年、

1886 (明治 19) 年に出版されたものがあり (33)、1885 (明治 19) 年のものが不明であるが、パリ市が発行した住所録にはこの年の公使館の職員が載っている (34)。その他、1886 (明治 19) 年の職員については、政府発行の年鑑にも載っている (35)。これらの職員名簿を本稿の最後に示しておく (補足資料 2)。

公使以外の職員は、基本的に書記官 (secrétaire) が 1 名、参事官 (conseiller) が 1 名、領事官補 (attaché) が 3、4 名、武官 (attaché militaire) が 1 名という構成であったが、1886 (明治 19) 年には武官がなくなっている。参事官として記載されているフレデリック・マーシャル (Frederic Marshall) は、イギリス人であるが、1871 (明治 4) 年からパリの日本国公使館に勤務しており、いったんは辞めたものの再び顧問として雇用され 1888 (明治 31) 年まで在職し、日本政府とヨーロッパ各国との交渉を長年に渡って任された人物である⁵。

公使就任式

茂韶は 5 月 25 日に新公使の信任状を提出した (36)。翌日、エリゼ宮で使就任式が行われ (37-40)、ジュール・グレヴィ (François Paul Jules Grévy) 大統領に直接就任の挨拶を行い、その挨拶とそれに対する大統領の返答が新聞に載っている (37)。挨拶の内容は形式的なもので、大要は以下の通りである。私は公使に就任したことを光栄に思っており、フランスとの友好を深めたいと思っている。天皇陛下は、日仏の良好な関係に感謝の意を大統領に伝えてくれと、そしてそれを一層深めてほしいと自分にお命じになった。その任務を遂行するために大統領のご支援をたまわりたい、というものである。それに対して大統領も、今の両国の友情に感謝し、我々は一層それを深めていくため、支援していくと答えている。

茂韶は公使としてパリに 1886 (明治 19) 年 7 月まで、およそ 3 年間滞在し、任期を終えて帰国した。公使としての活動は表 1 の通りであるが、

⁵ 横山俊夫『ザ・ヤトイ お雇い外国人の総合的研究』。思文閣出版 (1987)。

その中から主だったものを「政治・経済・軍事」、「社交界」、「学問・芸術」に分類して以下に紹介する。

3-3-2. 政治・経済・軍事

日本陸軍視察団のパリ訪問

大山巖陸軍卿率いる陸軍の視察団は、1884（明治17）年2月から翌年の1月にかけて、ヨーロッパの軍隊を見学して回った。フランスには1884（明治17）年5月5日に到着し、およそ7週間滞在した。この日本陸軍の視察団訪問はパリでも注目され、多くの新聞が記事にした。茂韶はイタリアから到着した使節団をリヨン駅に出迎え（48, 49）、6月19日にはパリのコンチネンタルホテルで視察団と盛大なパーティを催し（68-70）、翌6月20日には公使館において大山巖陸軍卿、ジュール・フェリー（Jules Ferry）首相らフランスの閣僚、及びベルギーやスペインの外交官らを招いて晩餐会を催した（69, 71-73）。

郵便為替条約の締結

日仏間郵便為替条約は、日本とフランスの間での送金を簡便化する目的で締結され、1884（明治17）年12月9日、パリにて茂韶が批准書を交わした（76-80）。

メートル条約加盟

メートル条約は、度量衡の国際的な統一を目的として1875（明治8）年5月20日、17カ国によりパリで締結された国際条約である。日本は10年後の1885（明治18）年に加入を決定し、翌年の4月16日に公布した。

本条約に基づいて発足した国際度量衡委員会（Comité International des Poids et Mesures, CIPM）が発行した1885（明治18）年の活動報告書“CIPM1885”（111）を調べたところ、日本の加盟は、茂韶が日本の政府に強く働きかけて実現したことが分かった。彼は1884（明治17）年の国際度量衡委員会の会議に参加した際に、委員会の事務局長を務めていたヒルシュ（Adolphe Hirsch）博士から日本の参加を勧められ、これに賛同した茂韶は、日本の政府に加入の必要性を説

いた。農商務省はそれを受け入れ、1885（明治18）年1月17日に加盟を上申して3月14日に裁可された。そうして茂韶はパリで加盟の手続きを行い^t、日本に送るメートル原器とキログラム原器の作製を手配した。実際に原器が完成し、日本に届いたのは5年後の1890（明治23）年のことで、中央度量衡器検定所（現・産業技術総合研究所）に保管された。メートル原器は、2012（平成24）年に「メートル条約並度量衡法関係原器」として国の重要文化財に指定された。

フランスの海軍技士エミール・ベルタンを日本に招聘

1885（明治18）年に日本国海軍は、軍艦の建造と新しい造船所の建設のため、ルイ・エミール・ベルタン（Louis-Émile Bertin）技師の派遣をフランス海軍に求めた。フランス科学アカデミーの報告書（114）によれば、ベルタンの任務は日本で海軍卿を補佐し、軍艦の建造と兵器研究の指導を行うというもので、茂韶を通じてベルタンに依頼され、条件に満足したベルタンは1885（明治18）年10月27日に契約書に署名した。来日したベルタンは、7隻の主力艦と22隻の水雷艇を設計・建造した他、横須賀造船所を整備し、さらに呉と佐世保を新しい造船所建設の候補地に選定するなど日本の海軍史に大きな足跡を残した^u。

スペイン政府と関税に関して交渉

幕末に日本と欧米とで結ばれた不平等条約は、1911（明治44）年に全てが改正されるまでおよそ半世紀を要し、新政府が明治期のほぼすべての期間をかけて取り組み続けた大きな課題であった。今回の調査により、茂韶がスペイン政府と条約改正の交渉にあたっていたことが分かった。

^t 外務大臣井上馨「仏蘭西巴里府ニ於テ独逸国外十六国ノ間ニ締結セルメートル条約ニ加入ス」公文類聚・第十編・明治十九年・第一巻、国立公文書館アジア歴史資料センター、レファレンスコード：A15111077100

^u <http://tokyoespress.info/2018/12/11/フランス航空教育団来日100-周年記念事業、2019年に日/>

イギリスの新聞 Banbury Advertiser 紙は、1885（明治18）年11月26日の記事の中で、茂韶がスペイン外務省と関税に関して精力的に交渉を行っており、間もなく合意に達するだろうと報じている（115）。この交渉は、井上馨外務卿が、前年に欧米諸国に対して条約改正基本方針を通告したことを受けて始まったものであった。しかしながら結局この時は改正に至らなかった。

ジュネーブ条約に署名

ジュネーブ条約は赤十字条約とも呼ばれ、陸戦における傷病者救護を目的として1864（元治元）年にジュネーブで締結された。日本が加盟したのは1886（明治19）年6月5日で、茂韶がスイスの公使館に赴いて条約に署名した（127-131）。

3-3-3. 社交界

当時のフランスの新聞は、社交界の華やかな晩餐会や舞踏会の様子を好んで報道しており、表1に示すように、茂韶や随子夫人がそのような場に出席したことが分かる記事が多数見つかった。その中から主だったものを以下に紹介する。

公使館で晩餐会を主催

1883（明治16）年6月14日、茂韶夫妻が日本の公使館において晩餐会を主催したことを Le Figaro 紙が伝えている（41）。記事は短いが「公使夫人はミカドの宮廷の特別衣装を身にまとい、部屋はあらゆる種類の日本の素晴らしいコレクションで飾られていた」と記しており、日本風を強く印象づける工夫が凝らされていたことがわかる。

ブリュッセルで舞踏会を主催

1884（明治17）年3月5日付の Le Figaro 紙は「ブリュッセルからの通信」と題した記事において、ベルギーのブリュッセルのカーニバル期間中に夫妻が舞踏会を主催したことを伝えている（47）。ベルギーでは2-3月がカーニバルの時期であるが、記事はカーニバルの期間中、最も素晴らしかったイベントは、疑いもなくブリュッセルのコンサートノーブルのサロンで日本の公使

である蜂須賀夫妻が主催した舞踏会であったと書いている。記事はさらに、この舞踏会のために茂韶がジプシーのバンドをパリから呼び寄せたことや、ベルギーの大臣や外交官のほとんどがこの舞踏会に参加したことや、見事な金襴の衣装に身を包んだ夫人が司会を務めたことを伝えている。

公使館で盛大な晩餐会、コンサートを主催

1884（明治17）年5月22日に夫妻がフランスの貴族ら250人を招待して公使館で開いた盛大な晩餐会とコンサートは、パリ市民の注目を集め、多数の新聞が報じた（55-64）。晩餐のテーブルの上には招待客の名前が記された日本の扇が置かれ、メニューは絹に印刷されていた。料理は和風のサーモンを除いて、フランス料理が出された。晩餐会の後で催されたパーティでは歌手とチェリストによるコンサートが開かれた。和紙で作られたコンサートのプログラムは、随子夫人の手製であった。随子夫人の姿は注目を集めたようで、資料61は夫人の出で立ちや立ち振る舞いについてだけを紹介した記事となっている。

夫妻は、1886（明治19）年6月30日にも公使館でレセプションと演劇を主催している（132-134）。

なお、随子夫人が1人で参加した活動もあり、1884年5月24日、メソニエ（Juste - Aurèle Meissonnier）の展覧会のオープンパーティを報じた記事では、出席者のリストの中に princesse Hachiouka（原文ママ）が見られるが、茂韶の名前はなく、夫人が一人で参加したものと思われる（65）。

フランス大統領主催の晩餐会に出席

1886（明治19）年1月28日、グレヴィ（François Paul Jules Grévy）大統領主催による外交官を招いての晩餐会が開かれた。記事には主だった参加者の名前が挙げられていて、その中に “le marquis Hachisuka（蜂須賀侯爵）” の名がある（117）。

なお、『和訳蜂須賀家記』^bには1883（明治16）年11月3日に、公使館においてフランス内閣の

面々らを招いて天長節奉賀の式を挙げ、翌日の新聞に報道されたと記されているが、今回の調査ではそれを報じた記事を見つけることができなかった。

3-3-4. 学問・芸術

学問や芸術の分野における主だった活動として、日本の芸術や建築をパリ市民に紹介したこと、また、学会に所属して日仏の学術的交流に貢献したことを挙げる。

日本の美術、建築、生活を紹介

1883（明治16）年6月16日からパリの装飾美術館（musée des Arts-Décoratifs）において茂韶によって日本の芸術家展が開かれたことを二つの新聞が伝えている（42, 43）。

また、1886（明治19）年3月25日には、フランスの中央建築家協会が開催した極東の芸術と日本建築に関する講演会に伏見宮貞愛親王とともに出席した（121, 122）。その翌日には日本博物館を訪れ、日本人の暮らしの様子が正確に再現されていることに対する感謝をディレクターに伝えている（123, 124）。

地理学会

茂韶は1885年（明治18）4月に開かれたパリ地理学会（Société de géographie）に参加した（95）。パリ地理学会は、この分野において世界で最初に発足した学会であり、当時は学者だけでなく政治家や冒険家などが参加し、外国からの参加も歓迎した。茂韶が出席した時もフランス大統領をはじめ、多くの外交官や探検家なども参加していたことが記事から分かる。翌年8月のパリ地理学会にも茂韶は参加する予定であったが（142, 143）、公使交代の時期と重なったため参加しなかった。

また、茂韶はフランス北部の都市リールのリアル地理学会の通信会員になった。1886（明治19）年1月の学会誌には茂韶に日本の資料を毎月送ってもらうよう学会として依頼したことが報告されている（116）。

衛生学会

1885（明治18）年4月25日に開かれたフランス衛生学会において、茂韶のメッセージを公使館の職員が代読した（96）。記事によるとこのメッセージは、フランス衛生学会が東京の衛生学関連の組織を表彰したことに対して感謝を伝えたものである。これはおそらく大日本私立衛生会が1883（明治16）年に発足したことを指していると考えられる。

3-3-5. その他

スパで保養

1883（明治16）年7月1日付のパリの新聞は、ベルギーの全権公使を兼務する茂韶がブリュッセルを訪れ、レオポルド王に公使の信任状を提出し、その後ベルギーに留まって夫人と一緒に保養地スパで過ごす予定であると伝えている（45）。

茂韶は同年9月にもスパにいたことが分かっている。駐イギリス公使森有礼および駐ドイツ公使青木周蔵と3人で条約改正に向けた方策を練るためであったが^v、今回の調査ではこの件に関する情報は見つからなかった。

茂韶はスパが気に入ったのか、翌1884（明治17）年6月22日の記事でも、スパで7月いっぱい家族と過ごす予定であると記されている（74）。

離任

茂韶の任期に関する記事が、1885（明治18）年10月16日と10月17日に二つの新聞に相次いで載った（112, 113）。3年の任期を終えて帰国することになるだろうという短い記事である。実際に茂韶が任期を終えてパリを出立したのは、翌1886（明治19）年7月24日であり（139-141）、3年2ヵ月のパリ滞在であった。後任は駐イタリア公使を務めていた田中不二麿に決まり、10月に着任した（145, 146）。

茂韶夫妻は、パリを出立した後、アメリカを経由して日本に戻ったと思われる。8月1日付のLe Gaulois紙において、ニューヨークのホテルに

^v 犬塚孝明。「鹿鳴館外交と欧化政策」. 明治聖徳記念学会紀要復刊第48号, 33-51頁(2011).

滞在中の数名な著名なフランス女性たちの名前が紹介されており、その中に日本の外交官蜂須賀侯爵夫人が含まれている(144)。

4. 帰国後の海外との交流

語学教育の推進

日本に戻った茂韶は、フランス語やスペイン語を学ぶための教育機関の設立に関わった。1886(明治19)年9月、フランス語学習の促進を目的とした仏学会(La Société de Langue Française)が発足し、私立学校の設立を申請し、11月に東京仏学校が開校した。フランスから帰国したばかりの茂韶は名誉会員として迎えられた^w。同様にフランス語教育を行うことを目的とした暁星中学拡充計画の委員となった(154)。徳島出身の鳥居龍蔵もここの夜学に通い、フランス語を学んだ^x。また、日本で初のスペイン語とスペインについて学ぶ組織である西班牙学協会(Sociedad de la Lengua Española)が1893(明治26)年3月に東京に設立され、茂韶が会長に就いた(151)。

喜賓会の設立

帰国後の茂韶は、実業家として数々の会社を興すかたわら政界に進出し、1888(明治21)年に元老院議員となり、1890(明治23)年に東京府知事、1891(明治24)年に貴族院議長、1896(明治29)年に文部大臣に就任した。このような実業家・政治家としての活動と、イギリス遊学や駐フランス公使として積み上げた海外経験とが結びついたのは、喜賓会(The Welcome Society)の設立と会長就任である。喜賓会は日本初の外国人観光客の誘致のための組織として1893(明治26)年に設立し、業務は旅行案内書の発行、内国勧業博覧会で来日した外客の接遇、優良ガイドへの

の監督証や徽章交付などを行った^y。茂韶が会長に就いた大きな理由の一つが彼の人脈にあった^h。喜賓会の設立メンバーには、この会の設立を強力に推進した渋沢栄一や益田孝といった茂韶のビジネスパートナーがいたし、茂韶がイギリス遊学中に交流を持った前述の古沢滋や三宮義胤や園田孝吉、そしてパリ外交官時代に交流があったと思われる面々が入っている。喜賓会の発足は、海外にも伝えられ、日本で発行されていた英字新聞“The Japan Weekly Mail”の1897(明治31)年の1月2日、5月15日、5月22日、12月4日に喜賓会が紹介された^z。フランスの資料でも喜賓会を紹介するものが見つかった(147-150)。

5. 終わりに

ヨーロッパの図書館のデジタルアーカイブを利用した今回の調査により、蜂須賀茂韶に関する多数の資料が見つかり、これまで情報が乏しかったイギリス遊学時代や外交官使時代の活動について多くのことが分かった。

茂韶はオックスフォード大学を卒業してからもしばらくイギリスに滞在し、ヴィクトリア女王や皇太子に拝謁したり、軍艦「金剛」「扶桑」「比叡」の進水式に出席したりと公的な行事に現れるようになった。彼がそのような場に出ることができたのは、当時在英の特命全権公使であった上野景範の計らいがあったと思われる。そしてそういった経験が、イギリスから帰国後してからすぐにグラント元アメリカ大統領やドイツ皇孫ハインリヒの接待係という大役を任されたことや、駐フランス国特命全権公使を拝命することに繋がっていった。

パリでの公使在任中の活動については多くの資料が見つかり、多彩な活動内容が明らかになった。条約関連では、ジュネーブ条約、日仏間郵便為替条約、メートル条約に署名した。この中では

^w 佐光(2007)(脚注f) 560頁。なお、佐光は一時帰国中のこととして記しているが、任を終えて帰国した時期である。

^x ラファエル・アバ、「外国語学習から見た鳥居龍蔵の学問的な歩み」徳島県立鳥居龍蔵記念博物館研究報告、第2号、1-21頁(2015)。

^y 中村宏。「戦前における国際観光(外客誘致)政策—喜賓会、ジャパン・ツーリスト・ビューロー、国際観光局設置」、神戸学院法学第36巻第2号、107-133頁(2006)。

^z The Japan Weekly Mail; A Political, Commercial, and Literary Journal, Japan Mail Office, Vol. 27.

ジュネーブ条約署名がよく知られているが、メートル条約も日本の社会や産業に及ぼした影響は計り知れないものがある。国際度量衡委員会の活動報告書 CIPM 1885 (111) から、茂韶が国際度量衡委員会や日本政府と何度もやりとりを重ねて条約加盟にこぎつけたことが明らかになった。

また、デジタルアーカイブには古新聞が多く含まれているため社交界の情報も多く、茂韶夫妻が多数の催しに出席したことが分かった。夫妻は主催することにも熱心で、ベルギーのブリュッセルで開いた舞踏会や、パリでの晩餐会やコンサートや観劇は評判になった。記事のいくつかは随子夫人のいでたちや振る舞いが紹介されている。

今回の調査で得られた外交官時代の活動に関する資料は、フランス国立図書館電子図書館 Gallica によるものがほとんどであった。当然ではあるが、本稿で紹介した情報が外交官としての活動の全てではない。茂韶はパリに居住したのでフランスでの仕事为主であったと考えられるが、フランスの他にスペイン、ポルトガル、スイス、ベルギーの公使を兼務していた。これらの国ではデジタルアーカイブがまだ整備されておらず、茂韶の情報を探すことはできなかった。茂韶の外交官としての功績の全貌を理解するためには、別の方法を用いてそれらの国々での調査を行う必要がある。

次に、茂韶が藩主という旧体制を象徴する身分であったにも関わらず、維新後に海外遊学、そして外交官と見事に転身できた背景について考えてみたい。茂韶は徳島藩主となった直後に明治維新を迎え、徳島藩知事となったが、1871年(明治4)に辞め、イギリス遊学に旅立った。藩主であった期間が極めて短く、旧体制のしがらみが少なく済んだことは、彼にとって幸いであったように思われる。しかし一方では、短くはあっても藩主や知事を経験したことが海外においても有利に働いたことも事実であろう。イギリスやフランスでは、藩主・大名を表す prince という称号で呼ばれることが、公の場に出るときに大きな意味を持っていたはずである。後に、公使を務めていた時期である1884(明治17)年に明治政府から旧藩主らに爵位を与える華族令によって侯爵となつてからは marquis Hachisuka (蜂須賀侯

爵)と呼ばれるようになったが、これも同様にヨーロッパでの活動において役立ったはずである。茂韶はまた自分の体に流れる徳川家の血筋についても、その重要さを理解していた。彼の父親である第13代藩主蜂須賀斉裕は、徳川家斉の二十二男で、茂韶は將軍の孫にあたる。そして茂韶が妻と別れてから再婚した相手は、水戸徳川家の徳川随子であった。さらに息子の正韶は、最後の將軍徳川慶喜の四女徳川筆子と結婚した。ケンブリッジ大学に留学中であった正韶にこの縁談を勧めたのは茂韶であったという^{aa}。茂韶は徳川家との繋がりを積極的に強めたことがわかる。これらの点から、茂韶は進取の気質と保守性を兼ね備えた人物であり、バランス感覚に優れていたといえるだろう。彼は激動の時代の中、終生巧みに活躍し続けたが、そのような特質によるところが大きいと考えられる。

以上、本稿は蜂須賀茂韶の海外での功績について述べてきたが、茂韶という個人とは切り離しても今回の調査で見つけることができた資料には、歴史的に興味深いものが含まれていた。本稿の趣旨とは離れるので詳しくは述べていないが、イギリスで建造した軍艦「扶桑」「金剛」「比叡」の進水式に関する新聞記事は、情報が豊富であり、特に「比叡」については数日間の式典が事細かに綴られている。また、パリ時代の資料も多く見つかったが、それらから当時の外交官の仕事や生活やヨーロッパから見える日本の状況を知ることができる。表2で挙げた資料が今後活用されていくことを望みたい。

謝辞

本研究にあたり徳島市立徳島城博物館学芸員小川裕久様からご指導とご助言をいただきました。深く感謝の意を示し、御礼申し上げます。

^{aa} 徳島県立文書館編集・発行『第16回企画展 徳川慶喜と蜂須賀家一慶喜・娘への手紙一』(1998)。

蜂須賀茂韶の海外での功績

2020年4月17日受付
2020年10月6日改訂

2020年10月6日受理

表1. 海外での活動を中心とした蜂須賀茂韶の年表

西暦	元号	日付	出来事	資料 No.*
1846	弘化3	9月28日	第13代徳島藩主蜂須賀齊裕の次男として生まれる。	a, b
1868	慶應4/明治元		父齊裕が死去し、茂韶が14代藩主となる。	a, b
1869	明治2		2月、蜂須賀隆芳の娘斐（あや）と結婚。 6月24日、徳島藩知事となる。	a, b
1871	4		知事の職を辞す。居を東京に移す。	a, b
1872	5	1月	イギリスに遊学に出発。	a, b, f, g
1874	7	4月10日	日本に帰っていた斐と離婚。	b, d, f
		5月	茂韶の荷物を載せた馬車がオックスフォードで暴走した。	1
			オックスフォード大学ベリオールカレッジに入学。政治、経済学を学ぶ。1876年まで在籍。	b, f, g
1875	8	4月30日	三宮義胤とアレーシア・レイノア (Aletha Raynor) の結婚式で付添人を務めた。	2
1877	10	3月14日	バッキンガム宮殿にてヴィクトリア女王に拝謁。	3
		3月17日	英国外務省主催の晩餐会に列席。	4
		4月14日	ロンドンのサミュエル・ブラザーズ造船所で催された装甲フリゲート「扶桑」の進水式に列席。	5-7
		4月17日	ヨークシャーのハルで催されたコルベット艦「金剛」の進水式に列席。	8-16
		6月10日	コルベット艦「比叡」の進水式に出席のため立ち寄ったグロスターで歓迎を受けた。	17, 18
		6月11日-13日	ウェールズのペムブロックドックで建造されていたコルベット艦「比叡」の進水式および関連式典に出席した。スピーチは12日のディナーパーティの席で上野景範や園田孝吉らとスピーチを行った(資料No.21)。「比叡」の進水式は13日に行われた。	19-23
		9月	スコットランドのブレイマーに出かけた(訪問の目的は不明)。	24, 25
1878	11	5月17日	セント・ジェームズ宮殿にてイギリス皇太子に謁見。	26
		7月6日	ノースコート (Northcote) 大蔵大臣夫人のレセプションに出席	27, 28
1879	12	1月	イギリスから帰国。	a, b, f, g
		2月17日	アメリカ元大統領グラント (Ulysses Simpson Grant) 将軍およびドイツ皇孫ハインリヒ (Albert Wilhelm Heinrich) が訪日する際の接待係を命じられる。	b
		4月	アメリカ元大統領グラント将軍およびドイツ皇孫ハインリヒが訪日する際の接待係を茂韶が務めるとの日本の情報。	29
		11月5日	来日したドイツ皇孫ハインリヒの遊覧の接伴。	b

1881	14	5月	徳川随子（よりこ）と結婚。	b
1882	15	12月	駐フランス国特命全権公使を拝命。	a, b, f
1883	16	1月23日	スペイン、ポルトガル、スイスの公使の兼務が決定。	a, b, f
		3月5日	ベルギーの公使兼務が決定。	a, b, f
		5月11日, 14日	新公使として赴任する茂韶の紹介記事。	30, 31
		5月17日 記事	蜂須賀夫妻がパリに到着。	32
		5月24日	公使就任日（職員名簿に記載）。	33, 35
		5月25日	新公使の信任状を提出。	36
		5月26日	エリゼ宮で公使就任式。No.37に大統領に対する茂韶の就任の挨拶と大統領の返答が掲載。	37-40
		6月14日	公使館で晩餐会を主催。	41
		6月16日	装飾美術館で日本の美術展を開催。	42, 43
		6月23日 の記事	公使として着任した茂韶と公使館職員の紹介。	44
7月1日 の記事	ブリュッセルを訪れてベルギー国王に信任状を提出。夫人とスパで過ごす予定。	45		
1884	17	2月29日 の記事	茂韶と部下らがロンドンからパリに到着。	46
		3月5日 の記事	ブリュッセルのカーニバルにおいて、舞踏会を主催（夫人が司会を務めた）。	47
		5月5日	イタリアから到着した大山巖率いる日本軍の視察団をリヨン駅で出迎えた。	48, 49
		5月6日	日本の軍事視察団がパリに到着した。数日後、茂韶が大臣に引き合わせる予定。	50-54
		5月22日	公使館にて盛大な晩餐会とレセプション、コンサートを主催。	55-64
		5月24日	メソニエ（Juste - Aurèle Meissonnier）の展覧会のオープンパーティに夫人が出席。	65
		6月5日	スコットランドの政治家ホープ・ヴェア（Hope-Vere）とマリエ・ギルマン（Marie Guillemin）の結婚式に出席。 ポーロンビル（Etienne Edmond Martin）男爵の第3回オークションに参加。	66
		6月8日 の記事	ロシア大使館再開の記念パーティに参加。	67
		6月19日	コンチネンタルホテルで大山巖ら日本の軍人と会食。	68-70
		6月20日	公使館でジュール・フェリー（Jules Ferry）首相、コシェリー（Adolphe Cochery）郵政大臣らを招いて晩餐会を主催。大山巖も同席。軍事視察団は6/23にイギリスに向けて発つ。	69, 71-73
6月22日 の記事	ブリュッセルに出発し、7月いっぱい家族と保養地スパで過ごす予定。	74		
7月26日	リーニュ公（prince de Ligne）とエリザベス・ド・ラ・ロシュフール（Elisabeth de La Rochefoucauld）の結婚式に出席。	75		

蜂須賀茂韶の海外での功績

		12月9日	郵便為替条約締結（郵便為替による送金の条約署名）。12/9は批准を交わした日。	76-80
1885	18	2月5日	政治経済学会の会合に出席	81, 82
		2月16日	ナザル=アガ（Nazare-Aga）主催の晩餐会に出席。 *ナザル=アガはペルシャの将軍で駐パリ大使。長年パリに住み、社交界では有名人だった。	83
		2月17日 -22日	ビクトル・ユーゴー（Victor Hugo）の83歳の誕生祝の支援者リストに茂韶の名前。	84-87
		2月27日 の記事	著名人のサインのコレクションの中に茂韶のサインも入っている。	88
		3月12日	セーヌ県で催された晩餐会とレセプションに出席（フェリー（Jules Ferry）首相夫妻、ペイロン（Peyron）提督夫人らと）。	89
		3月17日 の記事	フランス外務省主催の晩餐会とレセプションに出席	90
		3月18日 の記事	茂韶の部下がロッテルダムのホテルで浮気相手の女性に殺された。	91
		3月20日	ラ・ロシュフコー（La Rochefoucauld）伯爵のパーティに出席	92
		4月12日 の記事	トンキンの貧困者と負傷者のためのチャリティに参加。 *現在のベトナムのハノイは当時トンキンと呼ばれ、フランスの保護領であった。記事は清仏戦争で戦火に見舞われたトンキンのためのチャリティだと思われる。	93
		4月14日	茂韶夫妻がチリ大使館の会合に出席。	94
		4月24日	地理学会に参加。	95
		4月25日	フランス衛生学会で茂韶のメッセージを公使館職員オオカワが代読した。	96
		4月26日 の記事	4/28に日本公使館で晩餐会を開催する予定。	97
		5月10日	フランス外務省主催の晩餐会とレセプションに出席。	98
		5月17日	フランス海事・植民地研究所の落成式に出席。	99-100
		6月9日	ロシア大使館での晩餐会に出席。	101
		6月11日	茂韶夫妻がデ・チュイジー（de Thuisy）侯爵夫人のレセプションに出席。	102, 103
		6月11日	下院議長シャルル・フロケ（Charles Floque）夫妻の晩餐会に出席。	104
		7月11日	茂韶が産業会館のサロンで行われた籤に当選した。	105
		8月27日	ミラノに滞在中。（用件は不明）	106
9月23日	伏見宮貞愛親王がマルセイユに到着し、茂韶が出迎えた。 *親王は8月から1年間ヨーロッパ各国を歴訪した。	107-110		
10月9日	メートル条約に調印した。茂韶は条約加盟を日本政府に働きかけるとともに、メートル原器、キログラム原器の作製依頼に尽力した。	111		
10月16日、17日 の記事	公使の残りの任期と後任人事に関する情報が新聞に載った。	112, 113		

		10月27日	艦艇設計技師エミール・ベルタン (Louis-Émile Bertin) を日本に派遣するための契約書に署名した。	114
		11月	スペイン政府と関税について交渉中。(しかしこの交渉が身を結ぶことはなかった)	115
1886	19	1月	リール地理学会誌1月号に茂韶が学会に加入したことが記されている。茂韶は学会から日本の資料を送ってもらうよう依頼を受けた。	116
		1月28日	グレヴィ (François Paul Jules Grévy) 大統領主催の晩餐会に出席。	117
		3月7日	フランス外務省のレセプションに出席。	118
		3月9日の記事	伏見宮親王をグレヴィ (François Paul Jules Grévy) 大統領に紹介した。	119
		3月24日	サディ・カルノー (Sadi Carnot) 主催の晩餐会に出席。 *サディ・カルノーは政治家で、翌年にフランス大統領となった。	120
		3月25日	日本建築に関する講演会をサポート。	121, 122
		3月26日	日本博物館を訪問し、日本の生活と文化が表されていることを監督に感謝を伝えた。	123, 124
		5月4日の記事	ヨーロッパ歴訪中の農商務大臣谷干城をフランス大統領に紹介する予定。	125
		5月8日	フランス外務省のレセプションに出席。	126
		6月5日	ジュネーブ条約に署名。	127-131
		6月30日	日本公使館でレセプションと演劇を主催した。	132-134
		7月18日	茂韶がロンドンからパリに戻る。まもなく日本に帰国する予定。	135-138
		7月24日	パリを立出。	139-141
		7月-8月	官報や学術雑誌に茂韶が地理学会に参加する予定との記事が出たが、公使交代のため参加しなかった。	142, 143
		8月1日の記事	パリの貴婦人がニューヨークに多数集まっているという記事の中に、蜂須賀公爵夫人も名前がみられる。	144
		10月	仏学会が発足し、名誉会員となる。	f
		10月25日,26日の記事	茂韶の後任として田中不二磨が着任。	145, 146
1893	26	3月	日本初の外国人観光客誘致のための団体「喜賓会」が創立。会長に就任。	147-150
1893	26	3月	日本で初のスペイン語とスペインについて学ぶ Sociedad de la Lengua Española (西班牙学協会) が創立。会長に就任。	151
1896	29	6月	貴族院議長として種痘発見100周年の行事に出席。	152
1897	30	8月1日	1894-95年の日本赤十字社の活動報告において、茂韶が同社の常議員となったことが記されている。	153
1909	42		暁星中学拡充の委員。	154

*アルファベットで示した資料は本文中の脚注において、数字で示した資料については表2において、それぞれ出典を示している。

蜂須賀茂韶の海外での功績

表 2. 蜂須賀茂韶の海外の活動に関する資料

No.	種類	資料名 (掲載時期)
1	新聞 (英)	Oxford Times (1874/5/16)
2	新聞 (英)	Stamford Mercury (1874/5/8)
3	新聞 (英)	London Daily News (1877/3/15)
4	新聞 (英)	Morning Post (1877/3/19)
5	新聞 (英)	London Evening Standard (1877/4/16)
6	新聞 (英)	East London Observer (1877/4/21)
7	新聞 (英)	Brechin Advertiser (1877/4/24)
8	新聞 (英)	York Herald (1877/4/18)
9	新聞 (英)	Leeds Mercury (1877/4/18)
10	新聞 (英)	The Hull Packet and East Riding Himes (1877/4/20)
11	新聞 (英)	Exmouth Journal (1877/4/21)
12	新聞 (英)	Tenbury Wells Advertiser (1877/4/24)
13	新聞 (英)	Witney Express and Oxfordshire and Midland Counties Herald (1877/4/26)
14	新聞 (英)	Todmorden & District News (1877/4/27)
15	新聞 (英)	Launceston Weekly News, and Cornwall & Devon Advertiser (1877/4/28)
16	新聞 (ウ)	The County Observer and Monmouthshire Central Advertiser (1877/4/28)
17	新聞 (英)	Gloucestershire Chronicle (1877/6/16)
18	新聞 (英)	Gloucester Journal (1877/6/16)
19	新聞(英,ウ)*	South Wales Daily News (1877/6/12)
20	新聞(英,ウ)*	The Western Mail (1877/6/12)
21	新聞 (ウ)	The Tenby Observer and Pembrokeshire Chronicle (1877/06/14)
22	新聞 (ウ)	The Pembrokeshire Herald and General Advertiser (1877/6/15)
23	新聞(英,ウ)*	The Cardiff Times (1877/6/16)
24	新聞 (英)	Aberdeen Press and Journal (1877/9/11)
25	新聞 (英)	Aberdeen Press and Journal (1877/9/12)
26	新聞 (英)	Morning Post (1878/5/18)
27	新聞 (英)	Morning Post (1878/7/8)
28	新聞 (英)	Western Times (1878/7/9)

29	新聞(英,ウ)*	The Merthyr Telegraph, and General Advertiser for the Iron Districts of South Wales (1879/4/18)
30	新聞 (仏)	Le Figaro (1883/5/11)
31	新聞 (英)	Yorkshire Post and Leeds Intelligencer (1883/5/14)
32	新聞 (仏)	Le Pays (1883/5/17)
33	行政文書 (仏)	"Liste de MM. les Membres du Corps Diplomatique", France. Ministère des affaires étrangères (1883/11/1)(1884/12/1)(1886/10/20)
34	パリ市発行住所録	"Annuaire-Almanach du Commerce, de L'Industrie, de la Magistrature et de L'Administration, ou Almachach des 1,500,000 Adresses", Paris,Didot-Bottin (1884, 1885, 1886)
35	政府発行の年鑑 (仏)	"Almanach National: Annuaire Officiel de la République Française pour 1886", Paris, Berger Levrault et Cie (1886)
36	官報 (仏)	Journal Officiel de la République Française (1883/5/25) (1883/12/31)
37	新聞 (仏)	Le Temps (1883/05/26)
38	新聞 (仏)	La Presse (1883/5/26)
39	新聞 (仏)	Journal des Débats Politiques et Littéraires (1883/5/26)
40	新聞 (仏)	Gil Blas (1885/5/27)
41	新聞 (仏)	Le Figaro (1883/6/15)
42	新聞 (仏)	Le Petit Journal (1883/6/19)
43	新聞 (仏)	Le Rappel (1883/6/19)
44	新聞 (仏)	Gil Blas (1883/6/23)
45	新聞 (仏)	La Gazette de France (1883/7/1)
46	新聞 (仏)	Le Petit Journal (1884/2/29)
47	新聞 (仏)	Le Figaro (1884/3/5)
48	新聞 (仏)	Le Matin (1884/5/6)
49	新聞 (仏)	Le XIXe siècle (1884/5/8)
50	新聞 (仏)	La Justice (1884/5/7)
51	新聞 (仏)	Le Matin (1884/5/7)
52	新聞 (仏)	Le Temps (1884/5/7)
53	新聞 (仏)	Le Rappel (1884/5/8)
54	新聞 (仏)	Le Petit Courrier de Bar-sur-Seine (1984/5/9)
55	新聞 (仏)	Le Figaro (1884/5/22)
56	新聞 (仏)	Le Figaro (1884/5/23)
57	新聞 (仏)	La Liberté (1884/5/23)
58	新聞 (仏)	Le Matin (1884/5/23)

蜂須賀茂韶の海外での功績

59	新聞 (仏)	La Liberté (1884/5/24)
60	新聞 (仏)	La Presse (1884/5/24)
61	新聞 (仏)	Le Gaulois (1884/5/24)
62	新聞 (仏)	Le Temps (1884/5/24)
63	音楽雑誌 (仏)	Le Ménestrel - Musique et Theatres (1884/5/25)
64	新聞 (仏)	L'Univers (1884/5/25)
65	新聞 (仏)	Gil Blas (1885/5/25)
66	新聞 (仏)	Le Figaro (1884/6/6)
67	新聞 (仏)	Le Gaulois (1884/6/8)
68	新聞 (仏)	Le Matin (1884/6/20)
69	新聞 (仏)	Le Temps (1884/6/21)
70	新聞 (仏)	Le Radical (1884/6/22)
71	新聞 (仏)	Le Figaro (1884/6/20)
72	新聞 (仏)	La Presse (1884/6/21)
73	新聞 (仏)	Le Rappel (1884/6/22)
74	新聞 (仏)	Le Matin (1884/6/22)
75	新聞 (仏)	Le Gaulois (1884/7/27)
76	行政文書 (仏)	Collection Complète des Lois, Décrets, Ordonnances, Réglements, et Avis du Conseil d'Etat (1884)
77	官報 (仏)	Bulletin des Lois de la République Française France (1884/12)
78	議会文書 (仏)	Impressions: Projets, Propositions, Rapports, etc. (Sénat. 1884)
79	官報 (仏)	Journal officiel de la République Française (1884/12/14)
80	行政文書 (仏)	Bulletin Mensuel des Postes et des Télégraphes (1885/2)
81	学術雑誌 (仏)	Annales de la Société D'économie Politique (1885-87)
82	学術雑誌 (仏)	Journal des Economistes (1885/1-3)
83	新聞 (仏)	Le Gaulois (1885/2/18)
84	新聞 (仏)	Gil Blas (1885/2/17)
85	新聞 (仏)	Gil Blas (1885/2/18)
86	新聞 (仏)	Gil Blas (1885/2/20)
87	新聞 (仏)	Gil Blas (1885/2/22)
88	新聞 (仏)	Gil Blas (1885/2/27)
89	新聞 (仏)	Gil Blas (1883/3/15)

90	新聞 (仏)	Gil Blas (1885/3/17)
91	新聞 (仏)	Le Gaulois (1885/3/18)
92	新聞 (仏)	Le Gaulois (1885/3/21)
93	新聞 (仏)	Le Matin (1885/4/12)
94	新聞 (仏)	Le Gaulois (1885/4/15)
95	新聞 (仏)	Le Temps (1885/4/26)
96	新聞 (仏)	Le Gaulois (1885/4/27)
97	新聞 (仏)	Le Matin (1885/4/26)
98	新聞 (仏)	Gil Blas (1885/5/11)
99	新聞 (仏)	Le Gaulois (1885/5/18)
100	学術雑誌 (仏)	La Gazette Géographique (1885)
101	新聞 (仏)	Le Gaulois (1885/6/10)
102	新聞 (仏)	Le Gaulois (1885/6/12)
103	新聞 (仏)	Gil Blas (1885/6/14)
104	新聞 (仏)	Gil Blas (1885/6/12)
105	新聞 (仏)	Le Gaulois (1885/7/12)
106	新聞 (仏)	Le Matin (1885/8/30)
107	新聞 (仏)	Le Matin (1885/9/23)
108	新聞 (仏)	Journal des Débats Politiques et Littéraires (1885/9/24)
109	新聞 (仏)	Le Matin (1885/9/24)
110	新聞 (仏)	La Croix (1885/9/26)
111	学術報告書	"Procès-Verbaux des Séances de 1885", Comité International des Poids et Mesures eds., Gauthier-Villars, Imprimeur-Libraire, Paris (1886)
112	新聞 (仏)	Le Matin (1885/10/16)
113	新聞 (仏)	La Croix (1885/10/17)
114	学術報告書 (仏)	"Notices et Discours. T. 1 : 1924-1936", Institut de France, Académie des Sciences (1937)
115	新聞 (英)	Banbury Advertiser (1885/11/26)
116	学術雑誌 (仏)	Bulletin - Société de Géographie de Lille (1886/1)
117	新聞 (仏)	Le Matin (1886/1/29)
118	新聞 (仏)	La Liberté (1886/3/8)
119	新聞 (仏)	Le Matin (1886/3/9)
120	新聞 (仏)	Le Gaulois (1885/3/24)

蜂須賀茂韶の海外での功績

121	新聞 (仏)	Le Matin (1886/3/26)
122	新聞 (仏)	Journal des Débats Politiques et Littéraires (1886/3/27)
123	新聞 (仏)	La Justice (1886/3/27)
124	新聞 (仏)	Le Temps (1886/3/27)
125	新聞 (仏)	Le Petit Journal (1886/5/4)
126	新聞 (仏)	Le Radical (1886/5/9)
127	新聞 (英)	Pall Mall Gazette (1886/6/7)
128	新聞 (英)	Banbury Advertiser (1886/6/10)
129	新聞 (仏)	Le Matin (1886/6/11)
130	行政文書 (仏)	"Archives Diplomatiques : Recueil de Diplomatie et d'Histoire", France. Ministère des Affaires Étrangères (1886/9)
131	行政文書 (仏)	Annales Internationales d'Histoire No.3 (1899-1900) p211
132	新聞 (仏)	Le Figaro (1886/7/2)
133	新聞 (仏)	Le Matin (1886/7/2)
134	新聞 (仏)	Le Pays (1886/7/3)
135	新聞 (仏)	La Liberté (1886/7/19)
136	新聞 (仏)	Le Matin (1886/7/19)
137	新聞 (仏)	La Gazette de France (1886/7/20)
138	新聞 (仏)	Le Pays (1886/7/20)
139	新聞 (仏)	La Liberté (1886/7/25)
140	新聞 (仏)	Le Matin (1886/7/25)
141	新聞 (仏)	Le XIXe Siècle (1886/7/25)
142	官報 (仏)	Journal Officiel de la République Française (1886/7/29)
143	学術雑誌 (仏)	Revue de Géographie (1886/8)
144	新聞 (仏)	Le Gaulois (1886/8/1)
145	官報 (仏)	Journal Officiel de la République Française (1887/10/25)
146	新聞 (仏)	Le Temps (1887/10/26)
147	仏日協会報 (仏)	Bulletin de la Société Franco-Japonaise de Paris (1909) p138
148	旅行雑誌 (仏)	Revue Mensuelle - Touring-Club de France (1909/9)
149	単行本	Rondet-Saint Maurice. "La Grande Boucle", Plon-Nourrit et Cie (1910) p122
150	日仏協会月報 (東京)	"France-Japon, No.15", Comité Franco-Japonais de Tokio (1936/1-2) p118

151	website	Ugarte Farrerons, V. (2012). "El Español em Japón". Recuperado el 5 de febrero de 2015, de Anuario 2012: "El Español en el Mundo" (Centro Virtual Cervantes): http://cvc.cervantes.es/lengua/anuario/anuario_12/ugarte/p01.htm
152	新聞 (英)	Homeward Mail from India, China and The East (1896/6/29)
153	報告書 (仏)	Pedone A. "Le Service de Secours de la Société de la Croix-Rouge du Japon Pendant la Guerre de la 27e-28e Année de Meiji" (1897) p20
154	仏日協会報 (仏)	Bulletin de la Société Franco-Japonaise de Paris (1908) p24

3つのアーカイブ British Newspaper Archive, Welsh Newspaper Online, Gallica でヒットした資料をそれぞれ英、ウ、仏で示している。

*は British Newspaper Archive と Welsh Newspaper Online の両方で同じ新聞がヒットした。

補足資料 1

テンビーでの「比叡」進水式前日の茂韶のスピーチ部分（1877年6月14日付 The Tenby Observer 紙掲載（資料21）より抜粋）

Prince Hachisuka said Your Excellency, Ladies and Gentlemen, - In obedience to the request that I should return thanks for "The Visitors," I gladly rise and thank you all for your hospitality, and for the pleasant manner in which you have received us. The company of this evening is one in which the two nations, English and Japanese, have most cordially met. It is not long ago since the two nations first actually came into friendly contact. One reason why we did not know each other until so recently was because of our geographical position, you living in one extremity of the world while we were almost in the other. If we look at the globe, the situations of the two countries, Great Britain and Japan, are almost as far apart as nature could have made them. In spite of all this distance, however, the intellectual movements of the two nations have secured a friendly tie. Great Britain has promoted the principle of fraternity, and Japan has followed the knowledge of the civilised country. Well, but what kind of country is Japan? It is a country surrounded by sea, in which it strangely coincides with the position of Great Britain. As Great Britain is famous for her navy and commerce, so Japan will, I hope, gradually become, if not her equal, at any rate her friendly rival. The object of our minister and suite, whom I am proud to join in coming down to this place, is to see the launch of a Japanese war vessel, which I hope will be successful. I trust that the gathering of ladies and gentlemen this evening represents the friendly connection of the two countries, and I thank you most sincerely for the kind manner in which you have received my humble remarks on behalf of the visitors.

<日本語訳>

蜂須賀公は次のように述べた。閣下、ならびに紳士淑女の皆様、「訪問団」からお礼の言葉をいただいたいとの求めに応じまして、私は喜んで立ち上がり、皆様からのおもてなしや心地よい礼儀に対して謝意を表します。今晚の集まりは、英国人と日本人とが真底からの誠意を抱いて出会った場があります。両国が最初に友好的に出会ったのは、遠い昔のことではありません。私たちがつい最近までお互いを知らなかった理由の一つは、あなた方が世界の一方の端に住み、我々が反対の端に住んでいるという地理的位置関係によるものです。地球儀を眺めると、英国と日本の両国は、自然が可能な限り遠く離して配置したかのようです。しかし、このように隔てられているとはいえ、両国は友好的な知的活動による結びつきをしっかりと築いてきました。英国は友愛の原理に基づき、また日本は文明国としての知識を学び、それに従っています。ところで、日本はどんな国でしょうか？ 海に囲まれた国という点で、偶然にも英国と一致しています。英国は海軍と商業において誉れ高い国ですが、私は日本が英国と対等とまでとはいかなくても、徐々に友好的なライバルとなっていくことを願っています。日本の公使と随行員 — そして私もこの場に列席の機会を得たことをとても光栄に思っていますが — 我々の目的は、日本の軍艦の進水を目撃することであり、それが成功裏に終わることを願うものであります。私は今晚お集りの紳士淑女の皆様が、両国の友好関係を示す代表者であると確信します。訪問団の代表として述べた私の拙い挨拶をご清聴いただき、感謝いたします。

補足資料2

パリの日本国公使館の職員名簿（資料33 フランス外務省が発行した外交官名簿より抜粋）

1ST NOVEMBRE 1883.

M. JUNII HACHISUKA, envoyé extraordinaire et ministre plenipotentiaire

M. COMEUZI, secretaire.

M. F. MARSHALL, conseiller

M. OUKAWA, attaché.

M. OHYAMA, attaché.

M. MATSUGATA, attaché.

M. le commndant TERAOUTSI, attache militaire.

1ST DECEMBRE 1884.

M. le Marquis JUNII HACHISUKA, envoyé extraordinaire et ministre plenipotentiaire

M.N....., secretaire.

M.F. MARSHALL, conseiller

M. OUKAWA, attaché.

M. HASHIGUCHI, attaché.

M. MATSUGATA, attaché.

M. le lieutenant-conlonel TERAOUTSI, attache militaire.

20 OCTOBRE 1886.

M. le Marquis JUNII HACHISUKA, envoyé extraordinaire et ministre plenipotentiaire.(Absent.)

M. HARA, secretaire, charge d'affaires par interim

M. F. MARSHALL, conseiller

M. Kato, attaché.

M. TASIMA, attaché.

M. MATSUGATA, attaché.

M. MYAKAWA, attache.

なお、同様の職員名簿がパリ市が発行した住所録（34）や政府発行の年鑑（35）にも掲載されている。前者には上記の資料になかった1885年の名簿が載っているので下に示す。

M. le prince Hachisuka, envoye extraordinaire et ministre plenipotentiaire.

MM. F. MARSHALL O, conseiller.

Comeuji, secretaire.

OUKAWA, attache.

Hashiguchi, attache.

Matsugata, attache.

le commandant Teraoutsi, attaché militaire.

PARIS, M. N..., consul. general.

Marseille...M. N..., consul.